あかいマフラー

作　工藤光穂　・　画　情野舞子

①

一九七六年十二月二十四日、韓国のソウル市は大雪でした。

雪がたくさん積もっていて、その上、吹雪で、歩くのも大変です。

夜の遅い時間なので人通りもありません。

その中をお母さんが男の子を連れて歩いています。

男の子の右足には、銀色の補装具が着けられていました。

しばらく歩いていると、お母さんは、門の前で立ち止まりました。その門には「天使園」（チョンサウォン）と書かれています。

気温は、零下十五度くらいで、とても寒い日でした。

②

松葉杖を持つ男の子は、手袋を着けていませんでした。寒さのために手は真っ赤に腫れ上がっています。

男の子にとって、銀色の補装具と松葉杖は、とても大切です。それは、その二つが揃っていないと歩くことが出来ないからです。

お母さんは、しばらく門の前で立ち止まっていましたが、急に男の子の方へ振り向くと、松葉杖を取り上げ門の中へ投げ入れました。

男の子は、大事な支えを奪われ雪の地面に倒れてしまいました。まだ、五歳くらいの幼い子どもです。

突然の出来事だったので、男の子は、どうして冷たい雪の上に倒れたのか、分かりませんでした。

③

しばらくしてから、お母さんが松葉杖を取り上げたからだと気づきました。

男の子は、どうしたのだろうとお母さんを見ました。

そこには、恐い顔したお母さんがいました。優しかったお母さんの姿は、どこにもありませんでした。

母　「この役立たず。お前なんか死んじまえ。生きていても仕方がないだろう。」

お母さんは、男の子に、そう言うと同時に男の子の横腹の辺りを蹴りました。

しばらく、お母さんは無言になりましたが、急に優しい表情に戻りました。

いつものお母さんの顔です。

④

母　「生きたいか…」

子　「うん…」

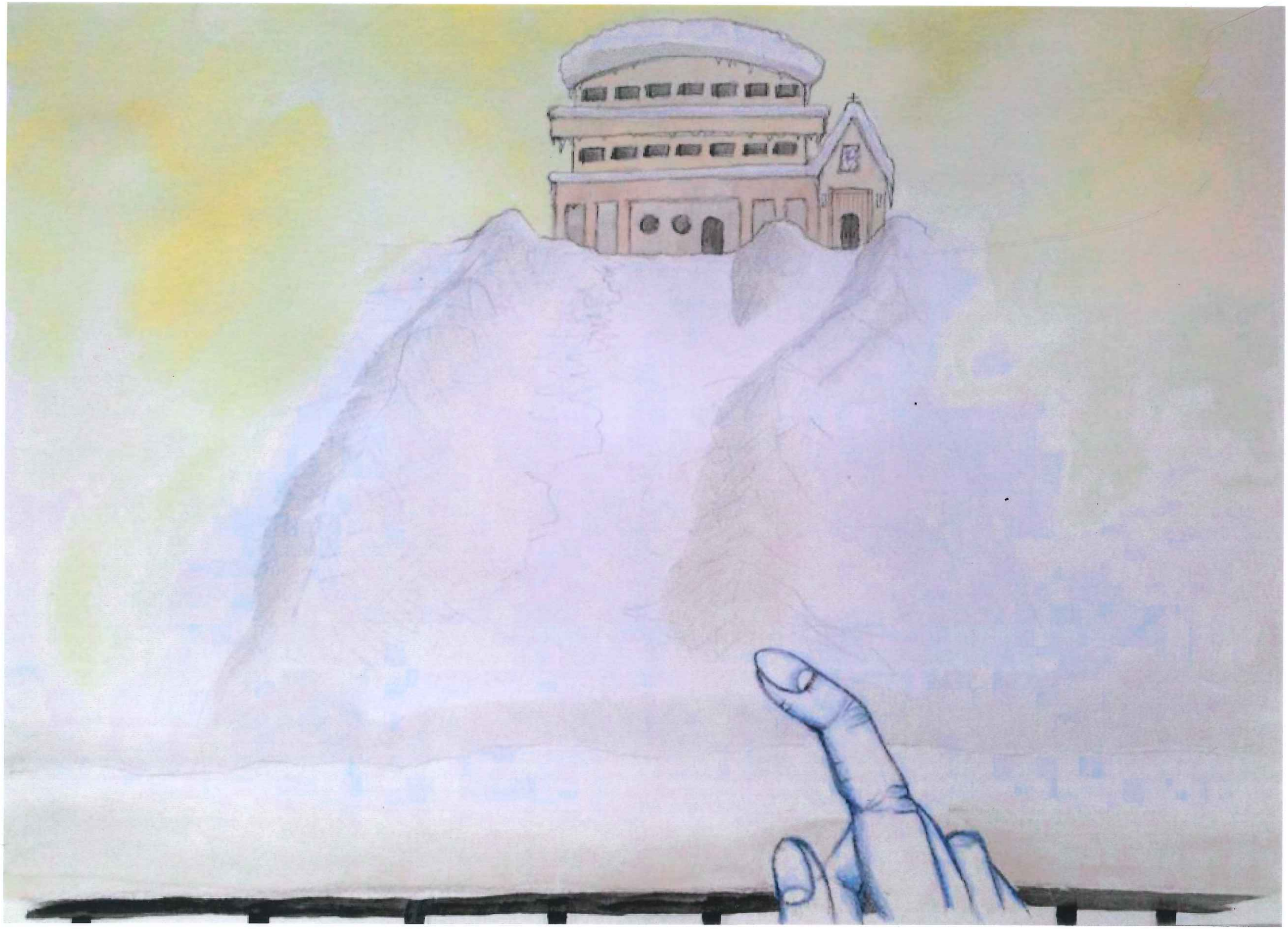
幼い男の子にとって、まだ生きるとか死ぬとかは、分かりませんでしたが、男の子は、思わず「うん」と答えました。

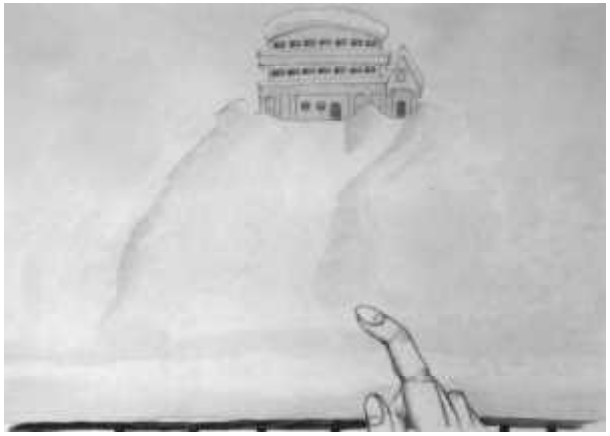
ところがお母さんは、又、恐い顔になりました。

母　「お前が生きていることが…。その事が罪なんだ…。やっぱり、お前は、死んだ方がいいんだ。」

恐い顔のお母さんの目から一粒の涙がこぼれ落ちました。

やさしい顔に戻ったお母さんは、男の子に言いました。





⑤

母「お前は、お母さんと一緒にいると幸せになれないんだよ。病院には連れて行けないし、薬も買えない。食べる物も禄に与えることができない…。」

男の子は、冷たい雪の上に倒れたまま、お母さんの話を聞いていましたが、心の中では、早くお家に帰って暖かい布団で寝たいと思っていました。

お母さんは、更に話を続けていますが、その声は、震えていました。

母「いいかい！よく聞くんだよ。この坂の上に大きな建物がみえるだろ。」

母親は、坂の上にある建物を指差して言いました。

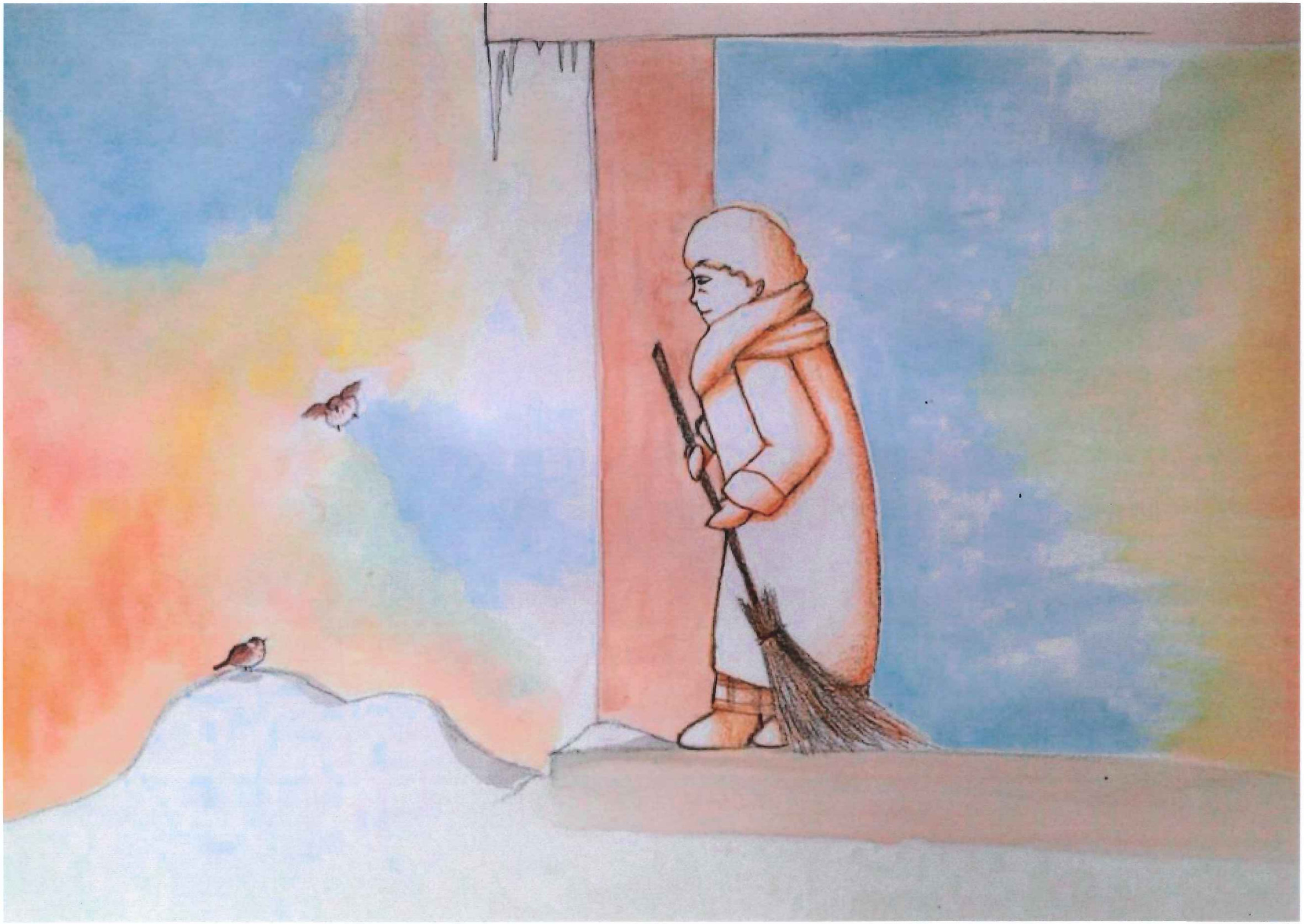
⑥

夜の十二時は、とっくに過ぎています。クリスマスです。付近のお家からクリスマスの音楽が聞こえてきました。

母「お前は、これから、あそこに行くんだよ。行ったら、ドアを叩いて人が出てくるのを待ちなさい。いいね、分かったかい。そこには、とても親切な人がいて、お前に優しくしてくれるんだよ。」

そう言うと、お母さんは、少し坂道を登り振り返ったかと思うと男の子の横を通り抜けて行きました。もう二度と振り向くことはありませんでした。

赤いマフラーが、だんだんと遠ざかっていき、とうとう見えなくなりました。



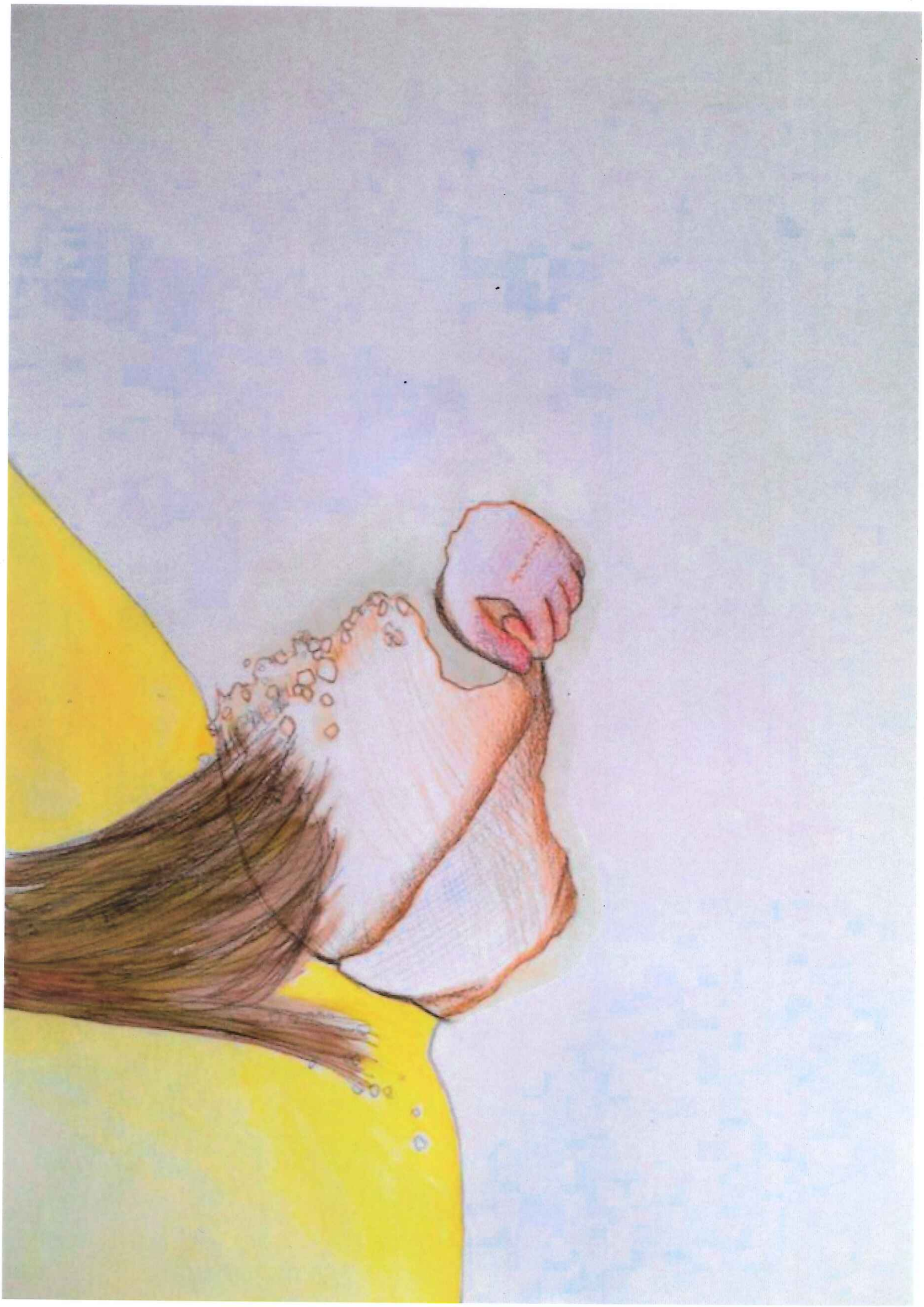
⑦

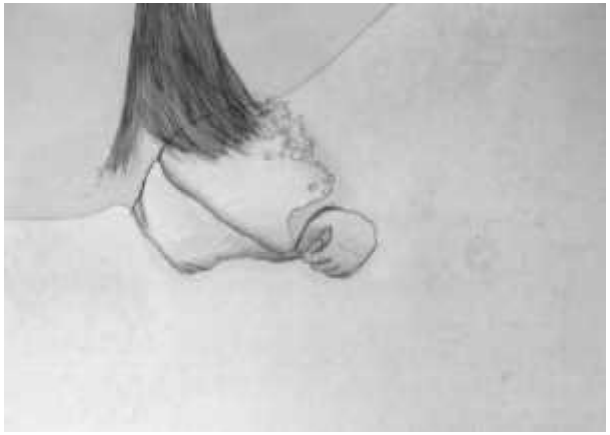
眞明（ジンミョン）は、いつも通り朝四時に起きました。彼女は、キリスト教の信者で毎朝四時に起きて施設の玄関を掃除したあと教会に行き、朝のお祈りをするのが日課でした。

眞明は、子どもたちが起きないように静かに布団から出ると、顔を洗って歯磨きを済ませてから防寒着に着替え手袋を着けてから廊下に出ました。

そして、掃除用具入れから箒（ほうき）とちり取りを出し、玄関掃除を始めました。

玄関の前に何か大きな固まりが倒れています。眞明は雪だるまだろうと思いました。





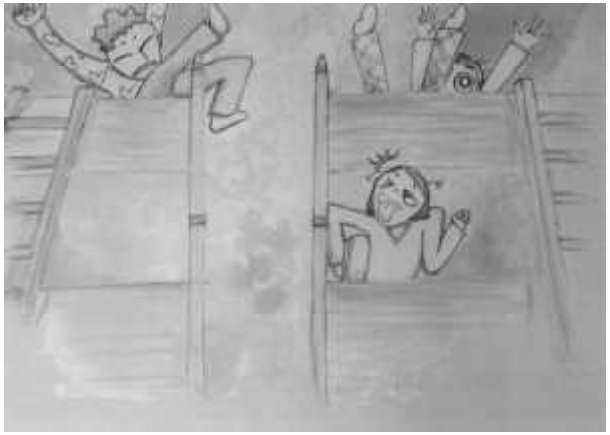
⑧

動いた。雪の固まりが、今、確かに動いたのです。眞明は一瞬驚きましたが、その目は好奇心一杯でした。眞明は雪の固まりに恐る恐る近づいていくと手に持っていた箒（ほうき）で雪の固まりを払いました。

すると、下から服の生地が見えました。眞明が、慌てて残りの雪を払いのけると、まだ、5歳程度の男の子が倒れていました。その足には、銀色の補装具が付けられていました。

眞明「生きているわ。大変、早く暖めてあげないと…」

眞明は、男の子を抱き上げると休憩室に走りました。休憩室では、三人の保育士が休んでいます。



⑨

眞明　「みんな起きなさい。救世主が大変なのよ。」

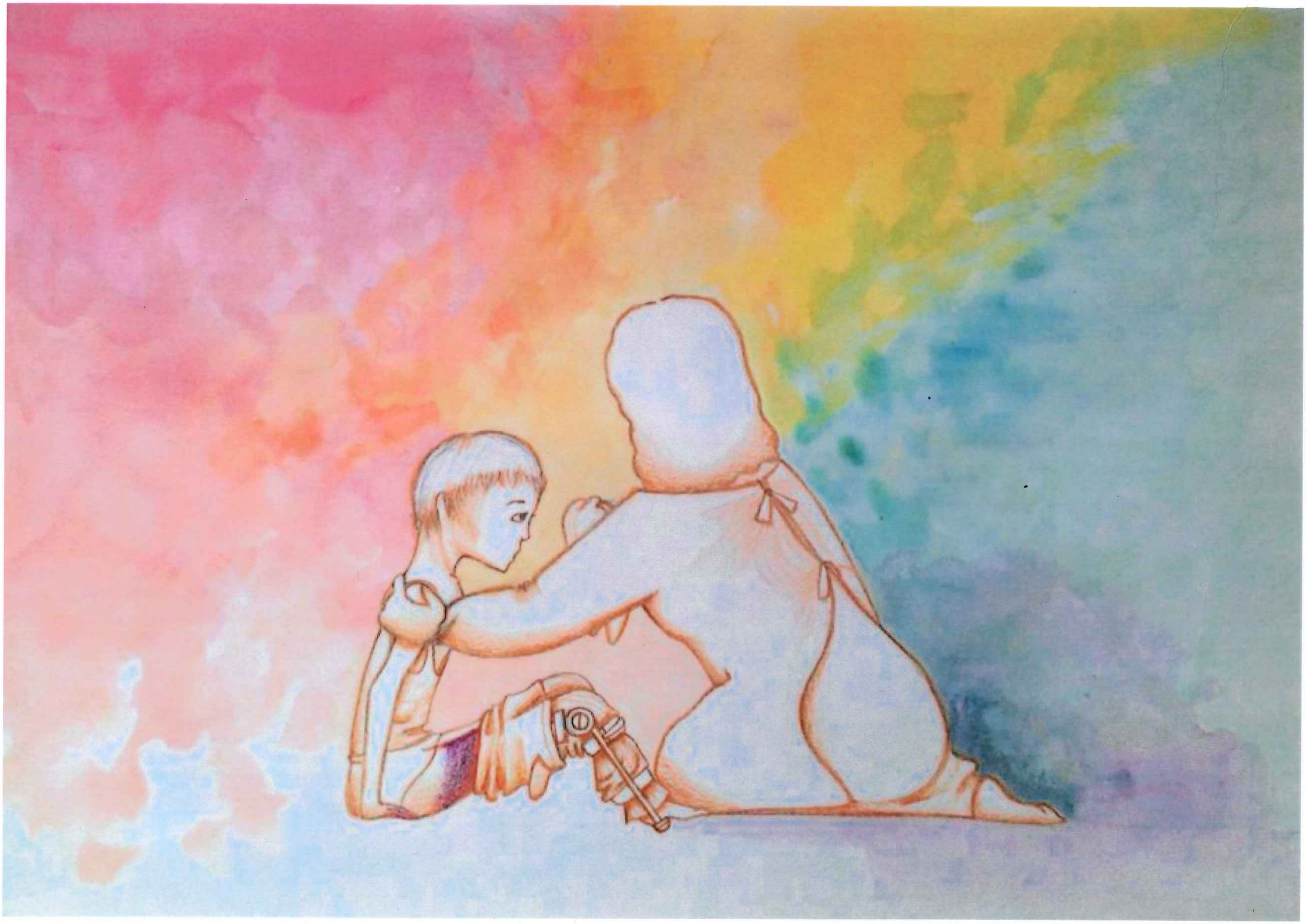
三人の保育士は、眠そうな目を眞明に向けましたが事態を察して飛び起きました。

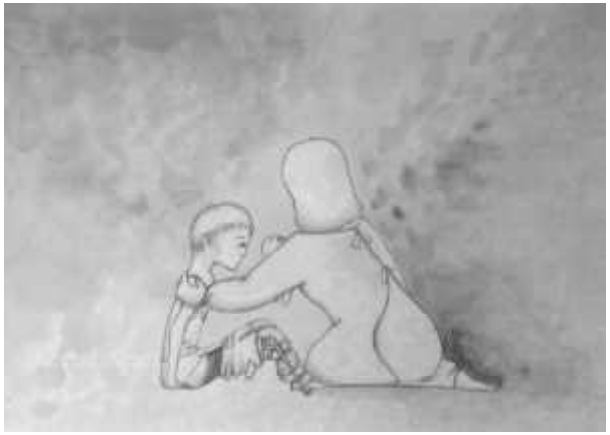
善映　「久しぶりの救世主ね…」

眞明　「そうよ。それより善映（スンユン）は園長先生を呼んできて、仙姫（ソンヒ）はお湯を沸かしてちょうだい。秀羅（スラ）は布団を敷いて。みんな早くよ…」

置き去りにされた子どものことを、この施設では、救世主と呼んでいました。

眞明は、床に子どもを静かに横たえるとタオルを持ってきて、優しく頭や顔を拭いてあげました。





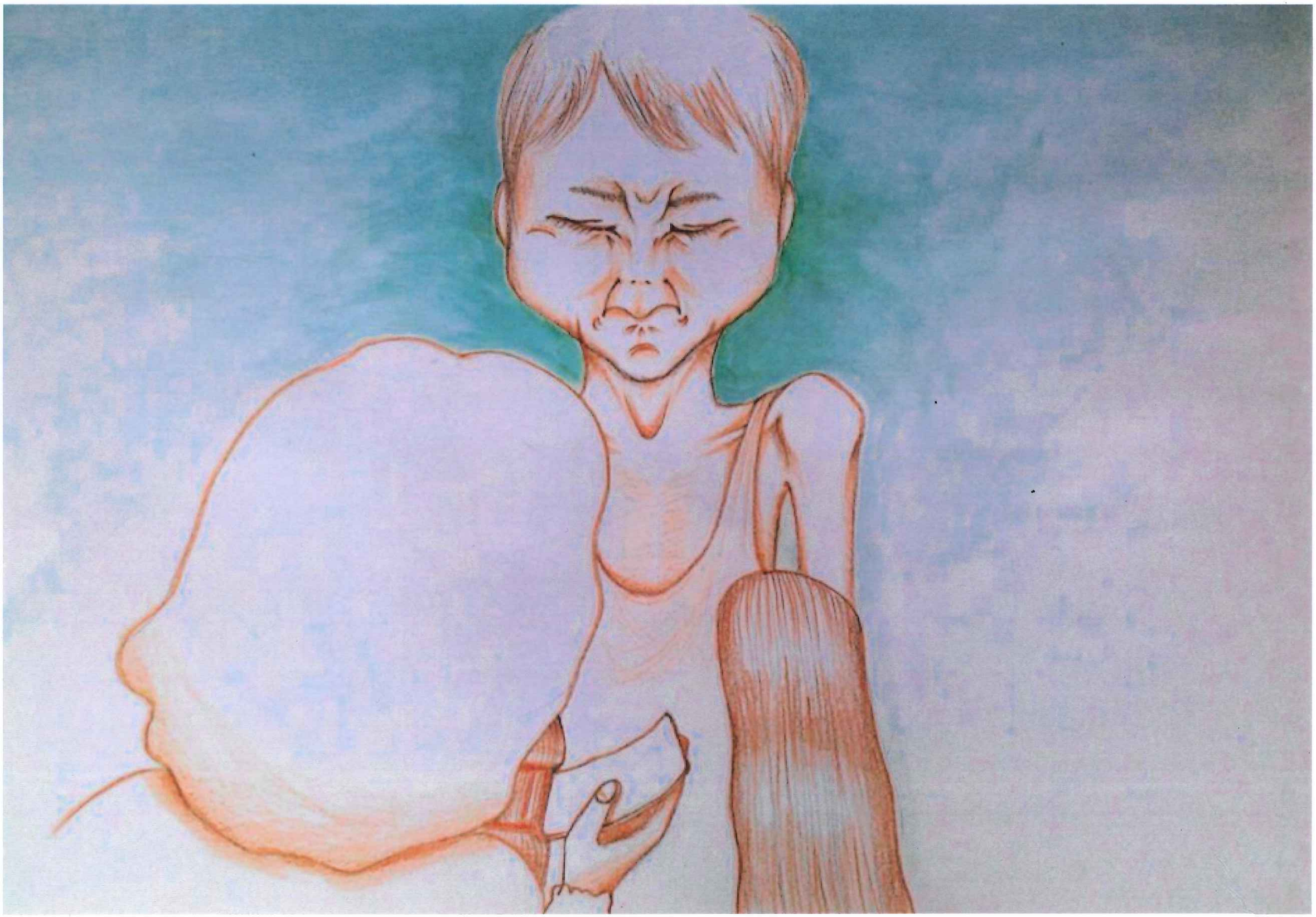
⑩

眞明が雪の中から助け出した時には、気を失っていた男の子が、いつの間にか気を取り戻し、紫色に変色した唇を小刻みに震わせ歯もガチガチと鳴らしていました。

眞明「もう、大丈夫よ。今、温かくしてあげるからね。」

眞明は、穏やかな口調で優しく男の子に話しかけながら濡れた衣服を脱がせました。

男の子の身体は、真っ青で冷え切っています。男の子は、銀色の補装具（正式には骨盤帯付長下肢装具）を右足につけていましたが、眞明は、それを外すのにしばらく、戸惑っていました。



⑪

銀色の補装具をつけている足が紫色に腫れ上がっているのが見えたからです。

眞明は、男の子の苦しみを少しでも早く取り除いてあげようと自分自身に言い聞かせ、ゆっくりと、そして、丁寧にベルトを外し補装具を脱がせました。

足は、紫色に腫れ上がり、痛々しい状態でした。

子「うっ」

男の子は、時折、声をだしましたが、痛みをこらえているのか、それは小さな声でした。

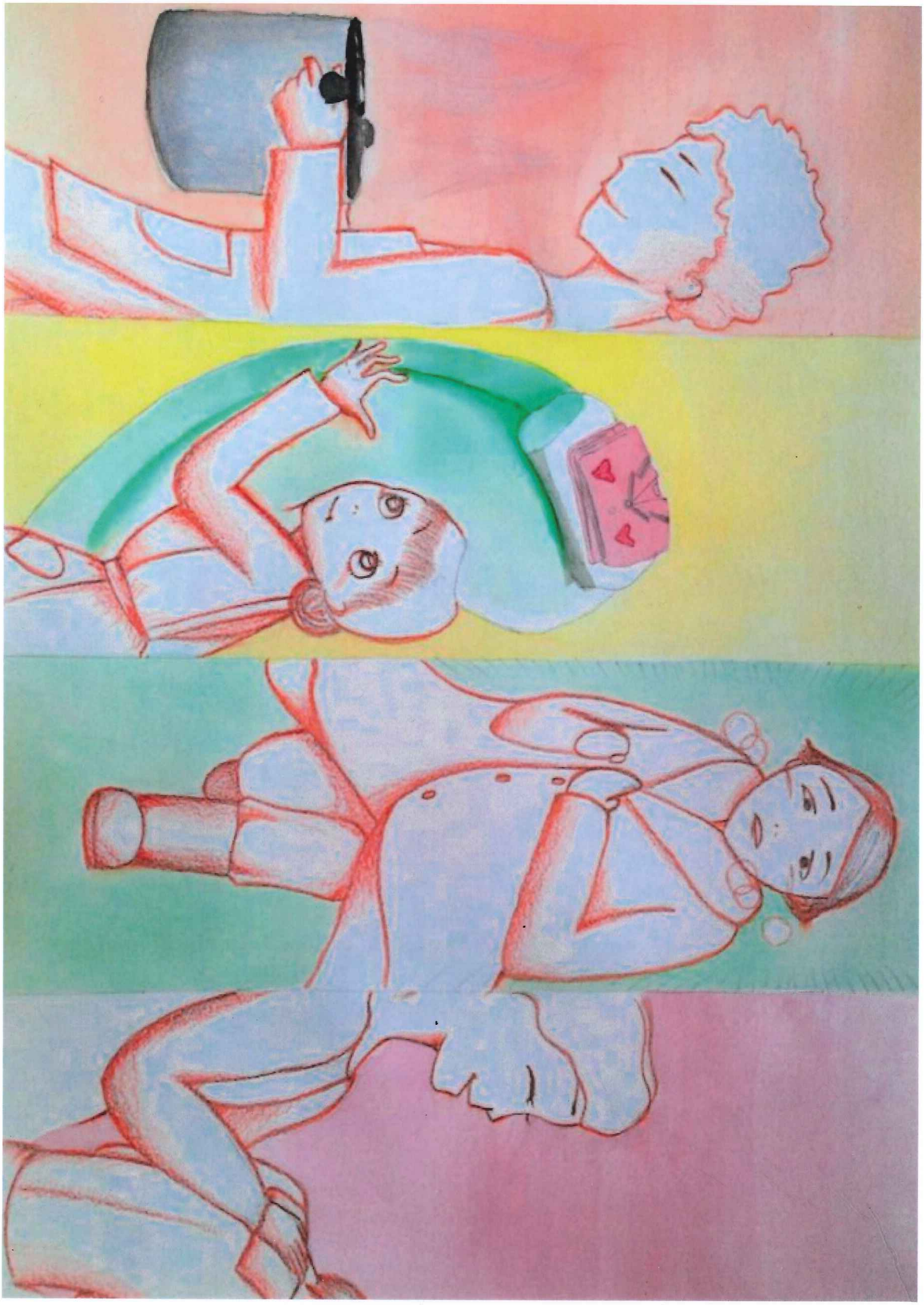
⑫

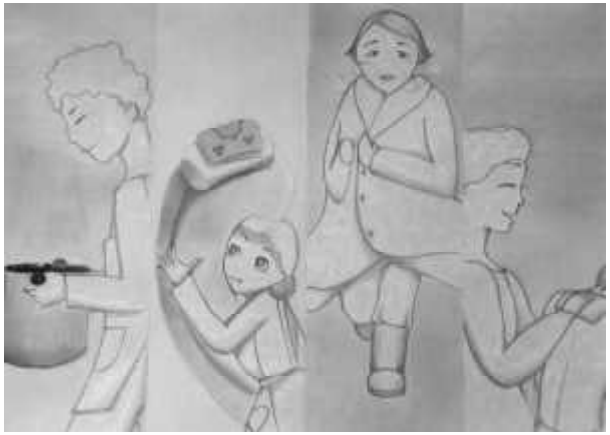
眞明は、思わず男の子を抱き締めてしまいました。可哀想でした。男の子が可哀想で仕方ありませんでした。どうしてか、分かりませんが怒りさえ覚えました。

眞明「神様、何故、こんな幼い子が、こんな苦しみを受けなければいけないのです。

…助けてください…。この子を生かしてください…。お願いします。」

眞明は、男の子を抱き締めて神様に祈りました。切なる祈りでした。その目からは涙があふれ出ていました。





⑬

三人の保育士たちは、とても手際よく働きました。

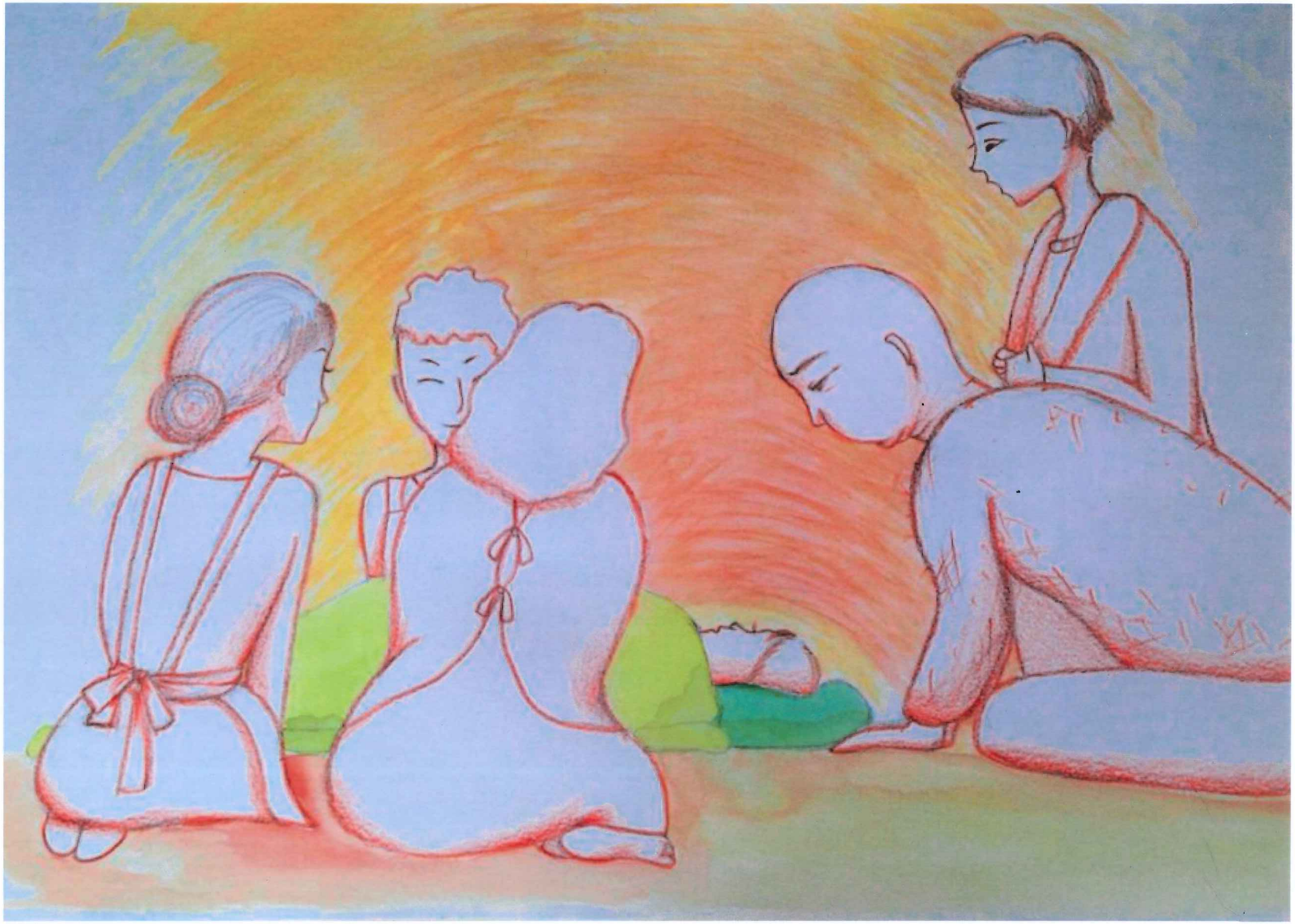
仙姫（ソンヒ）は鍋に水を入れてお湯を沸かしタオルや洗面器を準備しました。

秀羅（スラ）は布団と下着やパジャマを持ってきて早速布団を敷き始めました。

善映（スンユン）はコートを羽織り坂を下った所にある園長宅に走りました。

眞明は、仙姫の用意したお湯にタオルを浸し絞ってから、男の子の身体を拭いてあげました。

部屋の暖かさも手伝って男の子の頬に赤みが戻ってきました。冷め切った身体も次第に温かくなって唇の震えも止まっていました。



⑭

次に、新しい下着とパジャマを着せて布団の中に寝かせてあげました。

男の子は、温かくなり安心したのか、間もなくスースーと軽い寝息を立て始めました。

善映　「園長先生を連れてきたよ。」

善映が「はぁはぁ」言いながら戻ってきました。その後ろに園長先生が立っています。

園長　「子どもは大丈夫か。助かるか。」

眞明　「はい、大丈夫です。お昼になったら病院に連れて行きます。」

それを聞いて園長先生も安心しました。

園長　「今日は、クリスマスだね。クリスマスに授かったから、この子の名前を聖誕（そんたん）と名付けよう。」

⑮

そして、十年の月日が経っていました。

十五歳になった聖誕（そんたん）は、右足に銀色の補装具をつけていますが、松葉杖を使わずに運動場を歩いていました。

眞明は、聖誕が小学生になってから、歩くためのリハビリを、雨の日も風が強い日も雪の日も、毎日続けました。

聖誕は、最初は車いす、次に松葉杖２本、中学生になる頃には松葉杖一本で歩けるようになり、今では、その松葉杖も使わずに歩けるようになっていました。

眞明は、時にはやさしく、時には心を鬼にして聖誕を励まし続けたのでした。

⑯

眞明　「聖誕は、お母さんのことを憶えているの」

眞明が聖誕に問いかけました。

聖誕　「ぼくは、お母さんの顔を思い出すことはできないよ。でもね、あかいマフラーだけは憶えているよ。」

あかいマフラーの思い出だけで、聖誕は、満足でした。

聖誕　「お母さんが、ぼくを産んでくれたから、今、ぼくは、こうして生きているのだからね。」